

第Ⅳ章 近世の経塚

第1節 山梨の経塚研究史

江戸時代の地誌、紀行文、日記、随筆などには、しばしば経塚に関する記述がみられる。松平定能撰の『甲斐国志』（1814年）や黒川春村の『並山日記』（1850年）があり、当時の人びとが経塚遺物などに強い関心を示していたことをうかがうことができる。

『甲斐国志』古跡部のうち、秋山氏居館（中巨摩郡甲西町秋山）に関する記述の中に、慶安年間の頃、秋山の熊野権現社の一隅から掘りだされたという経塚遺物の詳細な記述がみられる。出土した銅製経筒の銘文から建久8年（1197）に甲斐源氏加賀美遠光の四男光経が経塚を営んだことが知られる。熊野権現社は遠光の嫡男で源頼朝に滅ぼされた秋山光朝の居館跡とされる所であり、その場所からの経塚遺物の出土は関心の高いものであったに違いない。また、秋山経塚については、『並山日記』にも経筒などが写生図入りで紹介されている。これらの記録類から鎌倉時代初期の経塚造営の一端を知ることができる。

さらに、『甲斐国志』仏寺部の鵜飼山遠妙寺（東八代郡石和町市部）の項には「鵜飼済度ノ経石七ツ、每石一字ツツ南無妙法蓮華経ノ字ナリ」とあり、寺宝とされる一石経を紹介している。この遠妙寺の経石については、『並山日記』にも「まさやかのかひ川とて、日蓮上人の経石をうつみたりしも、此ちかきほとゝ聞えたれと、いたくくさむしたれはゆきもたつねす」とあり、江戸時代に盛行した一石経の経塚に関連する記述がみえる。近世におけるこれらの記述は、珍しいものの紹介としての扱いであり、学問的な経塚研究は近代に入ってからのことである。

明治34年（1901）に山中笑は「経石に就きて」（『考古界』第一篇六号）を発表し、「最も名高き経石」として遠妙寺の経石をあげ、その出土地についても「石和川水中」や「遠妙寺の後方の地」とする考えを示している。なかでも注目されることは、「経筒を埋むる事の絶たる時代これに代りて経石を埋むる事の行はれしことかと思わる」と述べ、経塚造営の時代による違いを指摘していることである。

明治40年（1907）には高橋健自によって「経筒沿革考」（『考古界』第六篇八号）がまとめられた。この時期までに知られた全国の経筒を集成し、経筒年表を作成している。経筒に刻まれた銘文を並べているが、山梨の経筒としては建久8年（1197）在銘の秋山経筒と、明治20年から27年（1887～94）頃に北巨摩郡大草村（韮崎市）で発見された永正18年（1521）在銘の経筒があげられている。永正18年在銘の経筒は、すでに山中笑、和田千吉によって報告されていたが、このような中世的な経塚遺物である小形経筒をも含めた古代から中世までの在銘経筒の紹介は、経塚の時代的な様相を理解するうえで重要な意義をもつものであった。

大正2年（1913）に善応寺（中巨摩郡白根町大嵐）の裏山から平安時代の陶製経筒および磬、刀身、鉄鎌などが発見された。この経塚遺物については、石田茂作が「経塚から磬を発見した事それ自らが既に珍しい事であるが、その磬の鉄製であるのは、更に興味を覚える」（「経塚」『考古学講座』1927）として、経塚の副納品に磬のあることに注目して紹介している。善応寺は臨済宗妙心寺派となっているが、『寺記』によれば鎌倉円覚寺末で仏源禅師を開山としている。なお、善応寺に伝わる一木造りの千手観音像は平安期の作とされていることや、経塚が発見されたことと合せて、天台系の前身寺院としての存在が考えられている。

また、同年には雲峰寺経塚（塩山市上萩原）の発見もあった。平安時代の銅製経筒や陶製壺の経容器および銅鏡、火打鎌が雲峰寺裏山から出土している。火打鎌が副納品として出土した経塚は数少ない例である。雲峰寺も臨済宗妙心寺派の寺院であるが、かつて真言宗または天台宗であったといわれている。同時期に発見された善応寺経塚と雲峰寺経塚は、山梨の古代の経塚例として貴重である。これらの経塚遺物については、東京国立博物館に保管されており、蔵田蔵によって「経塚論4」（『MUSEUM』154 1964）で紹介されている。

昭和37年（1962）は山梨の経塚研究上きわめて重要な発見があった。康和5年（1103）在銘経筒の発見である。この経筒が出土した経塚の所在地は、東山梨郡勝沼町柏尾地内の白山平である。発電所の水路取入口の工

事中に自然石を用いた小石室6ヵ所現われ、4ヵ所から経塚遺物が発見されたという。康和5年在銘の銅製経筒、陶製外筒、銅製経筒、陶製容器、刀身、小玉、経軸などが出土しているが、特に康和5年在銘経筒は蓋に4行、身には本文23行、別記4行で783字という長文の銘があり、経塚造営に関する重要な史料を提供している。東日本で紀年銘のある経筒としては最古に位置づけられるこの経筒について、磯貝正義、仁科義男、上野晴朗、清水茂夫、馬淵和夫らが歴史学、考古学、国語学などの分野から研究報告を行っている。

昭和36年(1961)、上野晴朗は「甲斐国発見の鎌倉・室町時代陶器」(『甲斐路』第3号)の中で、秋山経塚の陶壺を中世陶器の研究という面から扱っている。さらに、上野は康和5年在銘経筒の『考古学雑誌』48-2号への発表の中で、他の経塚との関連にふれながら「平安までさかのぼる経塚は、主として山岳仏教派生の盆地縁辺の名刹に結びついて経塚が造立されて」とし、「鎌倉中期以後は専ら特定の地方豪族の信仰供養の目的から造立されるものも多く」なることを指摘している。県内においてそれまでに発見されていた経塚を紹介し、その造立について検討を行っていることは、山梨の経塚研究のうえで注目される内容である。

中世の経塚については、永正18年在銘経筒の出土した大穴塚が知られていたが、昭和33年(1958)には上蔵原経塚(北巨摩郡高根町)が発見された。盛土状の場所を開墾中に天文21年(1552)在銘の小形経筒と銭貨12枚が出土した。これについては赤星直忠・山本寿々雄によって、「山梨県北巨摩郡高根村出土の葡萄唐草文のある経筒について」(『県立富士国立公園博物館研究報告』3・1960)の報告がある。

さらに、塔の越経塚(北巨摩郡双葉町下今井)がある。経塚から出土した遺物は、円筒の紀年銘がみられる。この経塚については飯島進が、「甲斐国北巨摩郡双葉町塔の越出土の経筒」(『甲斐考古』1・1966)と題して発表している。また、三宅敏之は、「塔の越経塚-廻国納経に伴う一例として-」(『甲斐考古』5の2 1966)を報告している。さらに、「六角宝幢式経筒について」(『東京国立博物館紀要』第四号 1969)の中でも、塔の越経塚の詳細な報告をしている。これらの中世経塚の研究動向は、それまでと全く経塚研究といえば古代を中心に進められていた傾向がみられたが、中世、近世の経塚についても取り扱うことの重要性を認める気運が生じてきた現われであろう。昭和54年(1976)、菊島美夫は秋山経塚の出土品実測図を載せ、考古資料化を図っている。(『甲斐考古』13の1)

昭和59年(1984)に南巨摩郡富沢町徳間から、伝世品ではあるが経塚遺物と考えられる「藤原顕長」銘の短頸壺が発見された。この渥美窯の壺については、清雲俊元等によって「富沢町徳間発見の顕長・遠清銘の短頸壺について」(『甲斐路』52 1984)の報告がある。この報告にもあるように「顕長・遠清」銘の壺が出土した経塚は、静岡県三島市において発見されているのが唯一であり、これとの関連から徳間の壺も経塚遺品として検討する必要性が指摘されている。

昭和60年(1985)、七覚山円楽寺(東八代郡中道町右左口)に伝世されていた小形の銅製経筒が確認された。この元亀2年(1571)在銘の六角形の経筒は、塔の越経塚について二例目である。すでに知られているものは塚に埋められていたが、これは社寺へ奉納した可能性があり、田代は「七覚山円楽寺の経筒と廻国納経」(『山梨県考古学論集』1 1986)で、中世の奉納経筒のあり方について検討を行っている。

また、同年には甲府市上積翠寺の一の森経塚の発掘調査が行われた。山梨における本格的な考古学調査としては初めての例となった。調査の結果、平安時代末期から鎌倉時代にかけての三基の経塚が報告された(「一の森経塚発掘調査報告」『甲府市史研究』3・1986)

1970年代から80年代初めまでは、本県の経塚研究も停滞状況にあったといえよう。このことは経塚の新資料を扱うことができなかったことにも原因があろう。80年代中頃になって、古代や中世の新しい資料が加わり、再び経塚研究が前進する契機になった。

昭和62年(1987)、田代は「山梨の経塚」(『山梨県考古学協会誌』創刊号)において、県内の経塚遺跡や経塚遺物を集成し、山梨の経塚研究の現状と課題を述べている。特に研究分野として未開拓である一石経の経塚を取り上げ、古代、中世に続く近世の経塚としての紹介を行っている。

さらに、平成元年(1989)、「近世の経塚について-山梨の一石経経塚を中心として-」(『考古学雑誌』

74-4)を報告し、平成6年(1994)、「近世における一石経の遺跡」(『山梨考古学論集』Ⅲ)で、引き続き県内の資料集成を行い、近世の経塚の様相を探っている。また、昭和63年(1988)塩山市の寺屋敷経塚、平成元年(1989)大月市の近久保経塚、平成5年(1993)甲府市の高源寺経塚、平成8年(1996)富士山北口一合目経塚の発掘調査が行われ、近世経塚の考古学的取り組みが増えてきた。平成11年(1999)には民間信仰遺跡分布調査の一環として南部町の原間経塚の発掘調査が行われている。

第2節 山梨の経塚

1. 経塚について

経塚と呼ばれている遺跡は、紙本経や一石経などの経典を主体として埋納した場所である。近年、経塚の起源については、中国大陆や朝鮮半島であるとする考え方も提起されているが、わが国の経塚は、10世紀後半頃に畿内で始められたとされている。なお、寛弘4年(1007)に藤原道長が大和国の金峰山で行った埋経が経塚造営としては最も早い事例である。

11世紀から13世紀初頭に営まれた経塚は、写経した経典を土中に納めることから埋経とも呼ばれているが、経典以外にも銅鏡、刀身、合子、銭貨などの副納品が納められている場合が多い。このような経塚の造営の背景には、社会不安から仏典を書写し、土中に埋納し、弥勒下生の時まで備えようとする思想が認められるのである。全国的な広がりを示した埋経の経塚も、12世紀中頃を盛期として次第に衰退し、13世紀にはほとんどみられなくなる。

16世紀に入ると回国聖(六十六部聖)の納経と結びついた経塚の造営が流行する。埋納には小形の経筒が使われているが、諸国の霊場への奉納にもこの小形の経筒が使われている。中世末期に盛行した納経の経塚は、現世利益や追善、逆修供養のために営まれたものが多い。そして、回国聖の活動を反映してその分布は広範囲に及んでいる。

一石経の経塚は、中世に出現しているが庶民が主体となって営まれるようになったのは16世紀後半からであり、江戸時代に盛行する。一石経は小石に一字ないし数文字の経文を書写したものであり、多いものでは8万というものもある。共同体の病魔退散や五穀豊穡を願って一石経の書写を多数の参加によって行っている。また追善、逆修、死者供養をはじめ寺院の地鎮具や鎮魂具などにも一石経が用いられており、古代や中世のやや限定的な経塚のあり方とは異なり、多様なあり方を示している。

山梨の経塚についても各時代にわたってその存在が知られているが、近年の発掘調査によって新資料も報告されている。とりわけ近世の一石経が増えている。

2. 古代の経塚

山梨における古代の経塚は、平安時代の経塚をはじめ、それを受けつぐ鎌倉時代のものを加えて六例である。経塚の分布は、甲府盆地の縁辺部で盆地を眺望することができる山上に集中している。勝沼町の真言宗の大善寺は、かつては天台宗と推定されている。この寺域の山林より発見されたという大善寺経塚、大善寺東側の谷を隔てた白山平で工事中に発見された柏尾山経塚、塩山市にある臨済宗の雲峰寺は、甲斐国の鬼門に当たることから戦国武田氏の祈願所とされ前身寺院は真言宗と考えられている。隣接する金毘羅神社の一隅で発見された雲峰寺経塚、白根町の臨済宗の善応寺は、藤原期の千手観音像を安置している。この裏山の林道工事で発見された善応寺経塚、甲西町の熊野神社において江戸時代に発見された秋山経塚、近年発掘調査された甲府の一の森経塚などである。

六例の経塚の造営年代は、経筒の紀年銘から柏尾山経塚が康和5年(1197)である。なお、柏尾山経塚は六基、一の森経塚は三基と複数の経塚が存在し、各経塚の造営時期も異なっている。経塚遺物の内容から山梨の古代の経塚は、12世紀初頭から導入され、13世紀頃まで営まれたことは確かなことといえよう。

柏尾山経塚の康和5年在銘の銅製経筒は、筒身に744字、蓋に39字があり、合計で783字と長文が刻まれている。

る。和漢混淆文の文章は、勸進僧寂円の生い立ち、出家の動機や年齢、如法經書写の目的、場所、期間から写經後の供養や埋納の場所、日付、関係人名、寺院名にいたるまで記述しており、經塚造営の実態を詳細に伝えている。ちなみに紀年銘のある經筒では、東日本で最も早く造営された經塚として知られているものである。

柏尾山經塚の造営には、比叡山の学僧であった柏尾山寺往生院の亮範が導師となっていることや、雲峰寺や善応寺の前身が天台系であると推定されていることから、甲斐国における經塚造営の受容にあたって天台寺院が深く関わっていたことが知られよう。

これらの經塚は工事中に発見される場合が多くあり、そのために遺構、遺物などにおいて破損や一部を滅失してしまったこともあり、完全な例は少ない。しかし、柏尾山經塚や一の森經塚では、石組の小石室の存在や紙本經を納めた經筒およびその外容器をはじめとし、鏡、刀身、玉類など各種の副納品が出土しており、古代の經塚の形態をよく示しているといえよう。

この時期の經塚造営の担い手は、康和の經筒の銘文からも知られるように、政治的支配層を形成する人々であった。寂円による写經は康和2年(1100)正月頃から5年(1103)3月頃までと長期にわたり、写經後の行事も4月3日に行われたが国府に關係する藤原氏や在地の有力氏族の三枝氏などが参加している。同年4月22日柏尾山寺の東方の白山山腹に埋納を行なって、満3年にわたった事業は終わったのである。以後も埋經の機運は国中に広がり、大善寺、雲峰寺、善応寺などを拠点に営まれたといえよう。

なお、12世紀初頭に經塚造営の風習が畿内より伝えられた段階では、その造営の目的も公的、社会的な要素を保持していたが、やがて12世紀末になると次第に身内による追善供養などを主体とする私的、同族的な実践が顕著となってくるようである。

秋山經塚は、甲斐源氏の一族秋山光朝の追善供養として、弟の光經によって建久8年(1197)に営まれたものであった。光朝は加賀美遠光の長子であり、治承4年(1180)源頼朝の伊豆における挙兵にはじまった鎌倉幕府創建期の激動の中で、かつて平氏方に身を置いたことが災いして滅ぼされたとされる人物である。

一の森經塚は、1985年に発掘調査され、花崗岩の露頭する山頂において三基の經塚が発見された。第一經塚は、角柱状の石を用いて小石室を設けた中に陶製容器が納められていた。第二經塚は、一辺が80cmの方形で底部が敷石の石室を設けており、内部から陶製容器が約7個体分が破片の状態で出土している。第三經塚は、岩盤のすき間に角柱状の石を据えて小石室としていた。青磁と白磁の破片が出土している。

經塚は破壊を受けていたが、発掘調査によって貴重な資料が得られたといえよう。第二經塚の多量の陶製容器の存在は、經塚造営の規模を反映したものであろうか。鎌倉時代の初頭に位置づけられるとすると、この造営者は秋山經塚と同じく在地の有力者層が想定されるのである。

山梨の古代の經塚については類例も少なく、しかも偶然ともいえるべき発見であることが多く、資料的に經塚研究の進展に影響を及ぼしている。しかし、經塚遺物などの詳細な研究の発展や新資料の増加などにより、新たな經塚研究の発展を期待したい。

3. 中世の經塚

中世の經塚としては、19世紀末頃に韮崎市大草町で発見された大六塚(上条東割經塚)があり、永正18年(1521)の紀年銘のある円筒形の小型經筒が出土している。その後、天文21年(1552)銘の円筒形經筒が出土した高根町の上蔵原經塚、永祿4年(1561)銘の円筒形經筒と、当年(16世紀)銘の六角宝幢形經筒が出土した双葉町の塔の越經塚がある。さらに近年、中道町の七覚山円樂寺において、元龜2年(1571)銘のある六角宝幢形經筒が発見された。

これらの小型經筒を納めた經塚は、中世の六十六部聖に深く関わるものである。法華經を書写し、これを一国に一部ずつ納經してまわる六十六部聖は、回国聖とか六部とも呼ばれている。聖たちは16世紀に入ると納經に際して、小型で規格化された円筒形や六角形をした經筒を盛んに用いるようになる。

この種の經筒は、全国で約300点があり、紀年のあるものは約230点とされている。形態としては、円筒形の

ものは16世紀の前半から中頃までのものが多く、西日本より東日本での発見例が多いことと、六角形のものは16世紀の中頃から後半にかけてが多いことが指摘されている。山梨の発見例からも、その傾向はうかがえるものとなっている。

山梨の六十六部聖に関わる納経の経塚は、小形経筒を土中に納めるために土盛りをして塚を築いた大六塚（上条東割経塚）、上蔵原経塚、塔の越経塚の三例と、円楽寺の小形経筒のように直接寺院に納めた例がある。このように納経の経塚には埋納と奉納という二つのあり方が認められている。

なお、全国的には110ヵ所余りの小形経筒の発見地がある。しかし、実際の場所は全国六十六ヵ所の霊場やそこに関連する場所からは少ない結果となっている。七覚山円楽寺は、大分県の余瀬家文書の「六十六部奉納札所」（16世紀後半）に、横根と七覚山の二寺が見えることや、宝永4年（1707）の『塩尻』の「六十六部聖順拝路」の中に六十六ヵ国の寺院がみえ、甲州は七覚山があげられている。そして中、近世において七覚山円楽寺が霊場であったことは、寺側に伝世されていた元亀2年銘の経筒によっても確かめられるのである。これに対して、大六塚、上蔵原経塚、塔の越経塚は、いわゆる一国を代表するような霊場ではないようである。きわめて地域的なこれらの経塚の存在は、六十六部聖の広範な活動に基づくことが想定される。

奉納経筒としてきわめて特徴的な事例がある。島根県大田市南八幡宮の鉄塔に奉納されたものである。160点のうち6点が甲州のものである。永正18年（1521）「巨麻郡甘梨庄」、大永5年（1525）「巨麻郡加賀美」、大永7年（1527）「府中」、天文5年（1536）「甲州」、天文12年（1543）「甲州」、不詳（16世紀）「黒駒」であり、円筒形の経筒である。関東地方の経筒からも甲州の聖によるものも発見されており、甲州の六十六部聖も広域的に活動していたことが知られる。

16世紀の六十六部聖は、回国納経に際し、ある所では経筒を奉納し、他の所では写経を奉納し、あるいは納札を行うなど、いくつかの方法を使いわけて巡拝したことであろう。六十六部聖は一国一ヵ所で六十六ヵ国をめぐることを基本としながらも、主たる霊場に限る者や一国内に限る者など、さまざまな納経活動を展開したのである。その中で各地において納経行為の一環として経塚造営が行われたと考えられるのである。

納経に用いられた経筒は、銅板製で鍍金が施されている。高さは10センチ前後と小形であり、種類は円形、六角形が主体で、数例の八角形がある。規格性の強いこれらの経筒の筒身に刻まれた銘文も書式が類似している。円楽寺経筒は六角形（六角形宝幢形）であるが、その銘文は次のとおり。

〔 十羅刹女 下総住人圓金坊
〔(釈迦坐像) 奉納経王六十六部
〔 三十番神 元亀二年今日日

中央上部に釈迦如来、図でなく種子の場合もある。「奉納経王六十六部」の主銘文を中心に、右に法華経を守護する「十羅刹女」と左に「三十番神」の文字を配し、経筒を奉納した六十六部聖の国名（下総国）と人名（圓金坊）、および奉納の年月日（元亀二年＝1571年今日日）を記し、場合によって願文も付加する。

経筒内に納められた紙本経は残りにくいが、いくつかの資料では法華経であったという。山梨の事例では塔の越の六角形経筒に紙片の付着がわずかに見られる程度である。経典を入れた経筒の土中埋納にあたっては、陶製の壺や石櫃を用いることはわずかであって、その多くが直接埋納である。副納品についても鏡、刀身、銭貨などがみられるがわずかな事例である。なかでも比較的多いのが銭貨であるが、十数例である。塔の越経塚では開元通宝から洪武通宝までの138枚が出土している。上蔵原経塚でも12枚となっている。以上のような状況は、経筒の土中埋納自体も簡略化したこととも関連して、副納品の扱いも軽くなったのであろう。

先に述べたように、回国納経に際して六十六部聖は、追善供養をはじめ現世利益を目的とした納経を広範な人々に勤め、その依頼主のために納経の方法として、経筒を塚に埋納したり、寺社に奉納したり、ある所では写経を奉納し、あるいは納札を行ったのである。六十六部聖による小形経筒を用いた納経は、16世紀末の織豊期にほとんど行われなくなる。

中道町右左口の千野家には、正徳3年（1713）から享保3年（1718）にかけて六十六部の回国を実行した千

野忠右衛門の納経請取状164通が残されている。回国納経の風習は近世に入っても持続していることが知られるのである。

4. 近世の経塚

近世の経塚は、川原石などの小石を用いて経典を書写した一石経（礫石経）を土中に埋納したところである。また、その場所に記念碑としての標識（経碑）が建てられることが多い。一石経は、一個の石に経文を一字ずつ書いたものが多く、これを一字一石経と呼び、数文字あるいは数十文字などの場合を多字一石経と呼んでいる。このような一石経の書写埋納は、江戸時代に盛行期を迎えるが、その要因に近世社会における庶民層の台頭と信仰の広がりをはかることができる。それゆえに、山梨の各地においても一石経の経塚の存在を知ることができる。

1901年（明治34）に山中笑氏は『考古界』に「経石に就きて」を発表し、「最も名高き経石」として遠妙寺の経石を紹介し、経石については「経巻を筒へ納め地中へ埋めし経筒と経石とは連続するもの」との見解を述べている。以後、一石経の経塚については市町村誌などに散見するものの、近世経塚としての認識のもとに積極的にとりあげた研究はほとんどない。1987年の『山梨県考古学協会誌』の中で「山梨の経塚」が発表され、近世経塚が紹介された。その後1988年から89年にかけての黒川金山遺跡の調査の一環として行われた寺屋敷遺跡において、一石経の経塚が発掘された。続いて89年には近久保経塚、93年には高源寺経塚が発掘され、近世経塚への関心が高まってきた。

今回分布調査で取りあげることができた経塚遺跡は60ヵ所ほどである。これらから山梨における近世経塚の様相を考えてみたい。

勝沼町山の大塚経塚は、延享2年（1745）の経碑と一石経が数点および経塚造営の経過を記した文書のある事例である。経碑には「妙典全部書写石経塔」とある。塩山市千野の千野経塚は、「経石供養」と刻んだ宝暦8年（1758）の経碑の下から数千点の一石経が発見されたが、近くに移転し再埋納されている。御坂町夏目原経塚は、宝暦8年の「法華石経塔」を移設する際に、多量の一石経が出土したので再埋納したという。韮崎市穴山町の重久経塚は、「書写大乘妙典一部一石拝禮供養宝塔」とある寛保4年（1744）の経碑と数点の一石経である。

韮崎市旭町の上条北割経塚は、1850年代後半に建立された日蓮宗の題目塔の移転に伴い一石経が出土した。南部町の葛谷峠経塚は、日蓮五百年遠忌の題目塔の下部より5万点におよぶ一石経が出土した。

南部町と富沢町の境になる篠井山の山頂の篠井山経塚は、「妙法華経石」とある元禄7年（1694）の経碑の下部から一石経が発見されている。

西桂町の三ツ峠経塚は、「経王一字一石供養塔」とある天保6年（1835）の経碑と採集された一石経である。武川村下三吹経碑は、寛政3年（1791）で「大乘経一石一字書写供養塔」とあり、一石経が確認されている。富沢町馬込の正行寺の本堂須弥壇下に約400点の一石経が保管されていた。一石経の中に天保10年（1839）の年号が見られる。

塩山市の恵林寺鐘樓の基壇から49点の一石経が発見されている。一宮町田中の瑞蓮寺経塚は「南無阿弥陀佛」とある天明元年（1781）の経碑の下部より、「南無阿弥陀佛」と書写された一石経が出土している。

次に一石経の埋納は不明であるが経碑を紹介する。塩山市平沢経碑は享保3年（1718）で「一字一石法華経」とある。双葉町の米沢経碑は、天保13年（1842）で、碑文は「きやうつか」とあってきわめて特徴的な例である。櫛形町上市之瀬の妙了寺経碑は、文化12年（1815）で、「経石塔」とある。甲西町鮎沢の古長禅寺経碑は、宝暦11年（1761）、文化6年（1809）、天保8年（1837）の「大乘妙典一字一石塔」の三基と、嘉永元年（1848）の「一字一石法華塔」がある。甲府市若松町の信立寺経碑は、享保16年（1731）で「南無日蓮大菩薩」とある。大月市梁川町の新倉経碑は、享保15年（1730）で「法華経一部一字一石納所」がある。勝沼町勝沼の泉勝院経塚は、「経印塔」「一字一石拝」とある延享元年（1744）の経碑である。

近世経塚の発掘調査としては、塩山市の寺屋敷遺跡がある。鶏冠山中腹の尾根上に営まれた経塚であり、一石

経は7万～8万点が推定され、そのうちの1万3千点余が取り上げられた。多字一石経などから法華経を書写したことが明らかになっているが、造営時期は確定されていない。

大月市近久保経塚は、直径8m、高さ2mで円形状の頂上部分より、多数の礫に混じって一石経が出土している。なお、時期は不明とされている。

甲府市高畑町の高源寺経塚は、宝暦7年（1757）に五百年遠忌の塔を建て、その下に一石経を4千点ほど埋納したものである。

南部町本郷の原間経塚は、享保20年（1735）の経碑があり、石囲いの石室内より約6万4千点余の一石経が発見されている。

山梨の近世経塚の造営時期は、17世紀末から19世紀後半までが確認できる。なかでも大塚経塚や泉勝院経塚については、文書に造営の様子が記してあり、きわめて貴重な事例である。大塚経塚では又右衛門が村中へ願い、郷蔵の南東の一角に一石経を埋納し経碑を建てたという内容であり、また泉勝院経碑は若尾嘉七と佐十郎兄弟が造営したことが具体的に知られる。

18世紀に入って経塚造営が盛行してくる背景には、農業技術の進歩や普及により、農村社会の生産力の高まりがある。商業的作物の導入などによる貨幣流通の進展により、近世農民としての成長の中で、造塔、造仏、経塚造営や社寺参詣などの宗教行為が盛行する。このような風潮のもとに、経塚造営においては、多数の人と多量の経石を用いることによって、大きな功德が生みだせるという多数作善という思想が、近世庶民層に経塚造営を広く受容させることになったと思われる。

第3節 一石経の経塚

1. 一石経の埋納

一石経の埋納方法としては、「塚状に土盛りした中に一石経を納める」（近久保経塚）、「一石経そのものを積み上げる」（寺屋敷経塚）、「地中に土坑を設けて一石経を納め、その上に経碑を立てる」（葛谷峠経塚）、「建物の床下などに一石経を納める」（恵林寺一石経）などが知られた。なお、一石経の経碑を多く紹介したが、一般的には、経碑の下部に一石経が埋納されている場合が多い。

一石経埋納施設は、葛谷峠経塚の例のように多くは土坑であったといえよう。甕や箱などを経容器として用いたものは知られていないので、一般的には直接土坑内に一石経を納入していたようである。なお、全国的には横穴式古墳の石室内を利用している例もみられる。勝沼町山の塚経塚もその一つであろう。

一石経と共に刀身の一部と須恵器片が発見されていることや、『辻家記録』に「古キ塚有候ヲ掘崩シ経石埋メ」とあることから、古墳を利用した経塚であることが知られる。古墳分布が顕著な地域での経塚地名は、古墳の経塚への再利用の可能性を考えてみることも必要であろう。

一石経の書写は、一石に一字ずつ墨書した一字一石経の例が多く、一石に複数の経文を記す多字一石経の例は少ない。何千、何万という一石経を書写するにあたって、複数の者が書写したことがうかがわれる。近久保経塚の一石経では、楷書と行書の書体がみられる。また、明らかに筆跡の異なる例もある。

書写した経典の種類は、一石経の出土状況などからその一部であり、不明であることが多い。一般的には一石経の経塚に埋納された経典は、法華経であることが指摘されている。

経碑にみえる「妙典」「大乘妙典」「法華」「経王」「法華経」「大乘経」などは、法華経を意味しているが、経碑の下に法華経を書写した一石経が埋納された可能性が十分あるといえよう。

また、塩山市黒川の寺屋敷経塚は、取り上げた一石経は13,453点であり、総数約8万点と推定している。取り上げた一つに「一心称名」とあるのは、法華経の観世音菩薩普門品第二十五の一部であると指摘している。

法華経は巻一から巻八までの二八品で、題字などを入れて全文は69,607字であり、そして、使用されている文字は千八百数十文字である。このことから、一石経が約5万点出土している南部町十島の葛谷峠経塚では、一部を除いた法華経を埋納したのであろう。南部町本郷の原間経塚では、一辺が1mほどの石囲いの石室から約6

万4千点の一石経が出土している。その分類整理によって法華経であったことが明らかとなっている。富沢町馬込の正行寺の一石経は、多字一石経であり、法華経の二八品の中の「序品第一」「方便品第二」「如来寿量品第十六」「從地涌出品第十五」「妙音菩薩品第二十四」などとあり、法華経である。

なお、甲府市高畑町の高源寺経塚のように、石の中に墨書の痕跡がみられないものを含んでいるが、石をより多く積むことに意味があったのであろうか。

これらの一石経経塚の副納品は、古代や中世の経塚と異なり、大部分が一石経のみを埋納しているようである。寺屋敷経塚では、一石経の堆積層の直上に「刀子」が発見されており、数少ない副納品の例である。刀子の存在は教典の護持という考え方を示すものであろう。

2. 一石経の願意と多数作善

一石経の書写供養の願意は、一部の経碑や多字一石経などから知ることができる。古長禅寺経碑群のように、自然石を用いた宝暦11年（1761）の「大乘妙典一字一石塔」などでは、刻まれた文字も少なく願意なども不明である。一方、文化6年（1809）、天保8年（1837）の「大乘妙典一字一石塔」や、嘉永元年（1848）の「一字一石法華塔」などは、切り石を用いた角柱型の経碑であることから、四面に文字が刻まれ願意も詳細に記されている。

これらの碑文によれば、「國家安寧」「武運長久」「五穀豊登」「万民和楽」「家門福壽」「子孫栄久」などの現世利益にもとづくものや、また、父母の追善供養であることがうかがえる。鯉沢町箱原の天神ヶ滝経塚は、富士川舟運の水難者の供養のためであったことが知られる。全国的にも豊作祈願、病魔退散祈願などをはじめとする、きわめて身近な願いによって各地に一石経経塚が営まれているのである。

ところで、近世の経塚と古代・中世の経塚の違いは、中世までの経塚が一部の者により造営されたのに対し、近世の経塚は多数の者が参加すること自体に経塚造営の意義を認めたことの違いであろう。一石経の書写埋納は多数参加のきわめて容易な供養であり、多数作善そのものであった。

多数作善の思想は、広範に信者を結集し、一人一人が少しの經典書写を行い、多量の書写を成就することである。これらに参加する人びとが受ける功德は、個人の供養よりもはるかに優り、参加者が多ければ多いほど相乗的に功德は増大するというものである。

韭崎市旭町の上条北割経塚では、基台に近隣17か村の村名が刻まれている。「村講中」とあり、各村の題目講の人びとが参加して、一石経を書写し、経碑の題目塔を造立したのであろう。この造立にあたって、広く信者に縁を結んで作善を勧めたのは、日蓮宗の大輪寺であったといえよう。

また、一石経の埋納場所の一つとして、建物の床の下の場合について大月市初狩町の保雲寺一石経は、建物の建築時に地鎮具として埋納されたものと考えておきたい。今回の分布調査で確認された恵林寺鐘楼の一石経は、明らかに地鎮具としての役割をもった例と考えられる。山梨県では確認されていないが、骨蔵器と一石経が相伴している例などから、一石経が鎮魂具的な意味を持つことも考えられるのである。

さらに、一石経の伝説の中に、石和町の鵜飼山遠妙寺の一石経は、日蓮が鵜飼の翁の亡霊を済度したときのものといい、大月市の念仏塚の一石経は、親鸞が毒蛇済度したときのものと伝えている。民間伝承での一石経は、呪術的効果をもつ呪具として扱われている。

これらのことから、近世における一石経の書写は、それを後世に残すことを目的に土中深く埋納したのではなく、その多くが村落共同体や個人にとっても切実な社会的願望である五穀豊穰、病魔退散、あるいは追善供養、逆修供養などに経文の呪力を期待して供養を行ったのである。

3. 一石経経塚と寺院

一石経の経塚と宗派との関係をみたととき、日蓮宗との関連が目される。その背景は「日蓮上人鵜飼済度の経石」として、近世を通して有名であった石和町にある鵜飼山遠妙寺の一石経の存在である。

日蓮の身延山を有する甲州は、早くから日蓮の伝説なども多く、また、寺院数も一国で400カ寺と多い。日蓮は弘安5年（1282）10月13日に亡くなるが、江戸期に入ると四百遠忌（天和2年・1682）、四百五十遠忌（享保17年・1732）、五百遠忌（天明2年・1782）、五百五十遠忌（天保3年・1832）が行われ、各地で遠忌塔が造立されている。

『甲府の石造物』によれば、五百遠忌が美咲1丁目の養行寺、住吉本町の要明寺、国母8丁目の法元寺、五百五十遠忌は朝日5丁目の青雲寺、若松町の信立寺、国母4丁目の浄蓮寺などの遠忌塔を紹介している。なお、信立寺では一石経の書写が行われていることが確認できる。

甲府市の高源寺経塚は、宝暦7年（1757）の経碑がある。正面に「南無日蓮大菩薩」、裏面に「後五百歳中廣宣流布」とある。「後五百歳中」は、四百五十遠忌と五百遠忌の中間の年は、すなわち宝暦7年にあたる。「廣宣流布」は、仏法を広く宣伝することである。遠忌と遠忌の中間の一つの節目として、布教拡大を祈願して一石経の書写供養を行ったのであろう。

日蓮宗における遠忌塔や題目塔の造立と一石経の関係について、最も早いものとしては、篠井山経塚（元禄7年・1694）が知られたが、葛谷峠経塚、高源寺経塚や上条北割経塚の例から、その一端を知ることができた。なお、遠忌塔や題目塔の造立のすべてが、一石経の書写埋納を伴ったかは今後の課題であるが、一石経と日蓮宗の密接な関係をうかがうことができる。今回の調査でも身延山久遠寺のある南巨摩郡下ではその関係の深いことが知られた。

他の宗派と一石経の関係をみると、臨済宗では夏目原経塚（慈泉院）、古長禅寺経碑（長禅寺）、東陽院経碑（東陽院）があり、曹洞宗では千野経塚（常光院）、重久経塚（福泉院）、泉勝院経碑（泉勝院）、保雲寺一石経（保雲寺）がある。臨済宗、曹洞宗ともに一石経経塚に深く関与していることが知られる。日蓮宗、臨済宗、曹洞宗と一石経の関係が確認されたが、一石経の書写埋納や経碑造立における各宗派の具体的な取り組みを明らかにすることも重要であろう。なお、今回の調査では一宮町の瑞蓮寺から「南無阿弥陀佛」の一石経が出土している。浄土宗と一石経の関係を示すものであり興味ある事例である。

4. 経塚の地名

「小字一覧」から経塚に関連するものを示すと次のようである。

京塚（甲府市上阿原町）、経場（甲府市上帯那）、京塚（山梨市正徳寺）、経塚（韮崎市穂坂町上今井）、京塚（韮崎市三ツ沢）、経塚（勝沼町上岩崎）、経塚（勝沼町山）、経塚（勝沼町休息）、京塚（御坂町夏目原）、西京塚（御坂町夏目原）、黒経塚（御坂町成田）、経塚（一宮町国分）、経塚（一宮町中尾）、京塚（河口湖町小立）、石塚（南部町中野）、その他、塚がつく小字名は多いが、大部分が古墳と関連するようである。また、富士塚、不二塚などは富士山信仰に関わるものであり、行人塚（御坂町金川原）、山伏塚（一宮町上矢作）、法印塚（忍野村忍草）などは、行人や道者の修行場、または祭場と関係すると思われるものもある。

小字名の「経塚」「京塚」などについては、近世の一石経経塚との関係を反映しているものといえよう。勝沼町山の経塚、御坂町夏目原の京塚、一宮町中尾の経塚は、先に一石経経塚として紹介したところである。これらの例からも地名で経塚と呼んでいる地域の詳細な調査は重要であろう。例えば勝沼町山の真光寺西側は、地籍図によれば経塚とあり、その地番の一筆は周囲よりも1メートルほど盛土状に高くなっている場所である。そして、地元でも経塚と呼んでいる。さらに、この経塚から少し離れた地域が富士塚であるが、そこにも一筆が2メートルほどの盛土状に残っている場所がある。そこについても地元では富士塚と呼んでいる。

経塚と富士塚に関連して、次のような例もある。『北巨摩郡勢一般』（1930）の中に、日野春村（長坂町日野春）に「三ツ塚」があり、各六尺余で京塚、福千賀塚、富士塚が信州路を挟んで東西にあることを紹介している。これらの調査も期待されるところである。

5. 絵図の中の経塚

『五海道其外分間見取延絵図』は、幕府が道中奉行に命じて作成させた街道絵図であり寛政から享和期（1789～1803）にかけて調査や測量を行い、文化3年（1806）に完成させて幕府に献上している。その中に「甲州道中分間延絵図」がある。これについては同時に作られた絵図が山梨県立図書館にある。

この絵図には街道沿いの塚も記録しているのが知られる。阿弥陀海道宿の「念仏塚」、竜王町の「供養塚」、下今井村の「経塚」、穴山の「供養塚」などが認められる。

下今井村（双葉町下今井）の経塚は、街道沿いで集落の境界ともいえるべき位置にあるが、現在は一石経の経塚らしきものは消滅しており、「廿三夜塔」が立っている。

阿弥陀海道宿（大月市笹子町吉久保）の念仏塚は、元文年間（1736～41）に造立された「親鸞聖人念仏塚」である。『甲斐国志』古跡部には名号塚として、その伝承を詳しく紹介している。内容は、「毒蛇と化した吉という娘が街道沿いの池にあって往来人を悩ましていたのを、親鸞が毒蛇済度のため名号を石に書き池に投げ入れ成仏させた」というものである。また、「弥陀ノ名号石塚中ニアリ数百歳ヲ経ルニヤ文字中ニシミ入り」磨いても消えないとし、さらに「七八十年前ハ数多掘り出セシガ今ハ掘り尽シテ絶エテ得ガタシ」と記している。

竜王新町の供養塔は、長旅に疲れた旅人の行き倒れを悼んで、その供養と安全を祈って「南無阿弥陀佛」の六字名号塔を立てた場所である。穴山の供養塚も同様のものであろう。

『甲斐国志』の編さんに用いた村絵図の一枚に、文化3年（1806）の田野倉村絵図がある。それによれば村の南で往還沿いに「ヲ経ヅカ」と記されている場所がある。現在の都留市田野倉の桂川にかかる大原橋の脇である。「ヲ経ヅカ」は不明である。